

# 脱戦後の日本社会におけるバブル崩壊後の失敗と挫折のかたち

原 宏之

本論は思想史の立場からの文化の系譜の考察である。<sup>1</sup>  
一九八〇～一九九〇年代論として、特定の場所と時間に限定された話題をとりあげる。

一九八〇年代と一九九〇年代は、双子のディケードといえる。陽と陰、希望と失望という対照的な双子であると同時に、切り離せない連続性を含んでいる。八〇年代のハレの雰囲気は、バブルへと向かい、やがてバブルに包まれる好景気に支えられていた。経済的な期待感が未来への希望でひとびとを輝かせながら、ネガティブな部分は覆い隠されていた。「高度経済成長」という戦後の神話が、わたしたち日本人のプライドであり、それは第二次オイルショックを抜け出して、一九八四年（昭和五九年）から一九八六年（昭和六一年）の前バブル段階には輸出拡大を背景としながら「経済大国（一流国）」として強烈に意識されるようになり、また一九八七年（昭和六二年）から一九九〇年（平成二年）の実質経済成長率が二度も六%を超えるという経済面でのバブル期にもはや揺るぎないものとなった。

経済力により得た自信は当然のことながら、経済力の低下により根拠のないものとなる。ゼロ年代にまでつながる世界自由市場、民営化、サービス・情報産業社会による労働形態の不安定化など、一連のネオリベリズムは一九八〇年代から世界的に準備されていたものであったが、好景気に支えられていたうちは、日常の生活面、文化面にその負の部分は目立つことなく、社会は祝祭の雰囲気満ちていた。一九九一年（平成三年）のいわゆるバブル崩壊により好景気が一気に不況に転換したときに、景気を素材としたはりぼては一気に崩れ去り、九〇年代の社会は八〇年代の負の部分が剥き出しに表に出る陰惨な空気に包まれることになった。経済的な豊かさ（これは必ずしも、個々人の富裕の感覚にはつながらない財政規模の数字だ）が支配的な価値であった戦後は、戦後を脱する八〇年代、そして九〇年代にもやはり受け継がれるのであり、九〇年代の「ポストバブル」にわたしたちの価値観の転換は生じなかった。なんとかして景気回復をし、また経済成長を続ければ、「あの懐かしい幸福な過去」が戻ってくると信じられたのだ。上に挙げた要素のグローバル化による世界経済の転換のなかで、九〇年代の不況脱出はなかなか

うまくゆかない。九〇年代の特徴として出てくるものは、ほとんどが八〇年代に準備されたものであるのだが、それはネガを現像するときに、バブル崩壊という必然的ではあるものの突発的な事故によりポジが真っ黒になってしまったような、地続きの關係に両者はある。これを突破するのは、小泉純一郎首班の自民党・公明党の連立政権が、構造改革などの一連のネオリベリズムをもちや隠さずにポジティブに語る二〇〇二年体制（高校生・大学生などの若者層が、もはや八〇〜九〇年代の景気の転覆に影響を受けていない時代）によるのであるが、まずはこうしたことを前提とした上で、主に文化の側面から八〇年代と九〇年代を振り返ることにしよう。

### 第一節 バブル前夜の社会風景

図1は、一九八〇年代から二〇〇〇年代前半までの、実質経済成長率、前年度比の地価変動率、三ヶ月で調整した完全失業率をグラフで表したものである（地価は国土交通省のデータをもとに「三大都市圏」の用途別からの平均値、失業率は統計局労働力調査のデータを使用）。グラフを見て、ひと目でわかるのは、一九八六年から一九九一年にかけての異常なまでの地価の上昇率と、その後約十五年間の低迷ぶりの対照性である（ちなみに二〇〇六年度にようやく上昇傾向に転じている）。株価の上昇と下降はほぼ地価変動率と同じ

軌道を描いており、両者の暴落による資産の喪失は経済成長率に反映している。このグラフの異常さは、二〇〜三〇％台で変動した地価と同じ軸で見ても、確実に景気循環の乱調が見てとれることにあるだろう。そうして考えると、不景気から遅れてバブル崩壊の余波のように事後的に高まる、九〇年代後半から〇〇年代にかけての失業率の高さの切迫も理解されるといえるものだろう。株価や地価の上昇により、わたしたち日本人（所有者や資本家が日本人であることがあたりまえであった当時）の資産は、目に見えないかたちで急激に膨張して、また目に見えないかたちで消失した。経済面での金融活動、産業面でのサービス&デジタル商品、それらの生活への反映（土着意識や他者関係の透明さ）は、この時代の特徴であり、わたしたちがモノの威力に直面し、あらためて敗北感を感じるには九〇年代後半のはじまる一九九五年をま

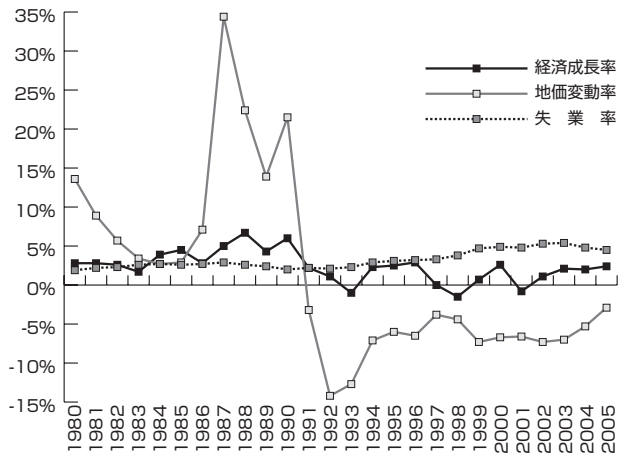


図1

つ必要があるが、これについては後で詳述することとしよう。

九一年は景気循環の上でも株価や地価の上でも、通常バブル景気が崩壊した年といわれる。しかしながら文化と生活の面では、その影響はいつでも経済より遅れてやってくる。一九九三年（平成五年）のマイナス成長を前に、失業率の増加など、「失われた一〇年」を実感する一九九二年（平成四年）から一九九五年（平成七年）を、便宜的に九〇年代前半、失業率が三%を超え、オウム騒動（地下鉄サリン事件など）と阪神・淡路大震災に見舞われた一九九五年以降を、九〇年代後半と本論では呼ぶことにする。

本論で考える八〇年代とは一九八〇年から一九九一年までの時代である。詳しい時代の分割は拙著『バブル文化論』（慶應義塾大学出版会、二〇〇六）に譲りたい。ここではバブル文化期にいたるまでの道筋を振り返ることにしよう。

一九八〇年代がどこからはじまるのかを客観的に位置づけるのはむずかしいし、あまり意味のない議論である。あいまいない方をするならば、「シラケ」という用語で総括される一九七〇年代的な停滞の時期を、活気ある「明るい社会」へと乗り越えてゆくのが八〇年代的なものである。一九六〇年代的なもの名残りとしての全共闘世代や革新自治時代の敗北や挫折感、長い「戦後」という意味での高度経済成長時

代に拍子を切るような二度のオイルショック、また物的豊かさの裏返しである若者の無気力や無関心、フォークソングからニューミュージックへ、マルクスやサルトルにインスパイアされた政治哲学や実存主義の文学の衰退、それらを引き受けるかたちでの非政治的な漫画や演劇、実験音楽の新たなアングラ化など、七〇年代的なものとしてひとまず形容できるものを超克してゆく過程から、一九八〇年代ははじまったといえる<sup>2</sup>。

バブル景気へといたる前の旧時代的（戦後的）なものと新時代の予感が共存する八〇年代のちぐはぐな感じは、一九八二年（昭和五七年）あたりを便宜的に回想してみてもよくわかるだろう。芸能界では中森明菜や小泉今日子など「花の82年組」と呼ばれる大型アイドルが多数輩出され、一度否定されたはずのアイドル文化が開花する推進力となる。また、若者の人文書離れを救うかのようにニューアカデミズム（略して「ニューアカ」と呼ばれる）といわれた、哲学、精神分析、人類学などが融合する新たな人文知のあり方が現代思想として日本で大流行するようになる<sup>3</sup>。また本格的な和製パソコンPC9801（ホームパソコンと呼ばれた）が発売されるなど、OA（オフィス・オートメーション）が本格化する時期でもありながら、夕張新炭坑閉山を巡る労働争議で社会が揺れもした。死者三三名を出したホテル・ニュージャパンの火災事件では、この東京の有名ホテルにしてみても、法令

違反のずさんな防火設備しかなことが明るみになり、戦後近代のはりぼてのひとつが崩された。若者たちに最初のテニスやスキーのブームが到来しながらも、同時に大学新卒の就職活動はとても厳しい年でもあった。フジテレビの長寿番組『笑っていいとも』の放送開始もこの年であり、いまでは忘れられた人気番組に萩本欽一の番組が並んでいたことなどからもわかるように、現在の新たな時代の脈動が確実に感じられながらも、同時に戦後を引きずっていたといえる。

NHKの『日めぐりタイムトラベル』の昭和五七年特集（BS2、二〇〇七年六月二日放送）で、編集・再放送された八二年当時の成人式の報道では、新成人が、あまり新聞も読まないし政治に関心もないがこれからもたなければならぬとインタビューに答えている。七〇年代、八〇年代、九〇年代、そして現在と、若者の政治意識の低下は「68年5月」のパリから先進諸国へと拡がった「自由」を求めての政治変革の大運動（日本では全共闘運動）の挫折以来一貫している——近年ではフランスを中心にこの学生・労働運動自体がその後の新自由主義体制を生んだのだという否定的な議論が高まっているが、この点は日本でも議論されてしかるべき点であり、その際の問題は「自由」とはなにかということである。当時はロッキード事件の裁判中であり、現在にいたるまでの政権与党中枢の腐敗状況に関する嫌気と問題意識が相半ばしているとも考えられる。だが、この関心はないが関心をもた

ねばならぬという、「が」の義務感はその後バブル景気の到来とともに忘れられてゆき、九〇年代にも、ごく一部のネオナシヨナリズムと結びついた歴史観を欠いた政治感情を別にすれば、引き継がれてゆく（この「が」の意識が復活するのはゼロ年代の二〇〇二年体制への危機意識によると考えられるここ数年の傾向である）。

同番組で再放送された八二年の特別番組『しあわせふうに生きてます』には、当時の流行ファッションであるスタジャン（スタジアムジャンパー、袖部分に革が使用されるようになるのはバブル景気の頃である）をまとった若者たちがスタジオに集まっている。性意識調査をめぐる議論のなかで、アナウンサーが、「セックス」、「性行為つまり性交」などと、直接的なことを用いていることが、いまの管理（コントロール）社会時代の窮屈なメディア表現と較べて印象的である。ある女性が語る、「最後までとっておいてたいせつにしておくといいのではなくてすね、早く売ってしまえというね、〔そういう傾向が周囲に多い〕」ということばの、ていねいな「語調」と露骨な（つまり正しい）「内容」のちぐはぐさや、七三分けのヘアに銀縁めがねの青年が「セックスは人間関係の潤滑油です」という無邪気とはいえない「性の自由」の観念も、いまから観ればルックスとことばのギャップがなんと滑稽であるものの、「68年5月」的な「自由」の観念がここにも浸透しており、さらに少なくとも表現の上ではより自由で実現の度合いではより窮屈であることが露呈されてい

る。後で見ると、九〇年代以降、この「自由」はもはや前提であり当然のことであるが、監視はより厳しく、内面化された規範（監視の視線を逃れる自己）と現実の行為（規範を破る自己）との間で、若者はさまようようになる。

NHK青年意識調査によれば、いまの自分の生活に覚えるのが（充実感）であるか、それとも（虚無感）であるかとの問いに対する答えは、この時期に明瞭な変化が見られる。一九七二年（昭和四七年）の回答はそれぞれ一六％／三六％、七六年（昭和五一年）が二三％／二六％と、虚無感が高いのに対して、一九八一年（昭和五六年）の調査では二七％／一六％と、「充実している」と答える若者の数が大きく上回るようになる（ちなみに二〇〇七年（平成一九年）の調査では、一六％／二九％と、再び「虚無感」が高くなっているが、これはまさに物質的豊かさの限界点（近代の限界）や地球温暖化などの問題から由来する将来への希望のなさが反映しているのだろう）。

この八二年という「充実感」をもつ若者の私生活の一端が、同番組で紹介されている。六畳間のアパートに住む二一歳の短大卒生OLの生活がレポートされている。月の生活費は一三万二〇〇〇円、内家賃はバス・トイレ付きで四万五〇〇〇円で、親から二万五〇〇〇円の援助を受けている。ボーダーの長袖Tシャツに黒いパンツ（まるで現代のよう）という出で立ちのこの女性は、ピンクなどを基調と

したファンシーな室内に座り、大型のコンポ（ステレオ）や、赤いスキージャンパー、テニスラケットなどをカメラに向かって紹介している。「まあこの部屋でわたしが一番大事にしているものはスキーの板とあとはベビーボード、これはサーフボードの小さいやつです。……この前（友だちと）ふたりでねえ、ラルフ・ローレンのジャケットを買いしました。見てください（笑）。これはけっこう高かったです。四万九〇〇〇円？ちゃんとキャッシュで買いました（笑）。わたしはあんまり永くこの一人暮らしというのはしたくないです。つまり！それは結論からいうと、早く結婚したいなあと思っていますよ」。一人暮らしの電話所持率が四〇％だった時代の、平日のOL生活と終末のスキー、サーフィン生活をする女性の本音である。

しかしながらこのような慎ましやかでありながらも夢を見る生活が、日本の全地域・全階層に広まっていたわけではない。この年のキーワードのひとつに「校内暴力」がある。

さきほどのOLの部屋にあった「ステレオ・セット」であるが、実はこの年の一月五日という正月もそうそうに、青森県でこれを巡る殺人事件が起きている。高校二年生（一七歳）の少年が母親に「ステレオを買い」と家庭内暴力を繰り返した末、父親により絞殺された。東京都の中学生が級友の食事に「水銀」をいれたり、小学校六年生が三名が教師の顔面に



殴る蹴るの暴行を加えるなどの事件も起きていて、さほど和やかな時代でもなかったようである。

この頃中学生による校内暴力事件が増加（全体の九六％ほどが中学校）して問題視されるようになる。同年の上半期には九八九件、補導者四六〇五名、この内角材やバッドを使用する対教師暴力は四割で被害が多い。喫煙などの素行不良に注意された腹いせに集団でリンチを加えるなどのパターンが多い。なかには生徒五〇人が教師に暴行を加えた例もある。首都圏でいうと、埼玉県、千葉県、神奈川県などの郊外型住宅街が中心であるが、農漁村にも拡大した。内臓破裂や骨折などの重傷を負う教師が相当数出るようになり、足立区の中学三年生のように傷害により生徒が逮捕されるケースも表れる。暴走族や校内暴力の問題は、一九八五年あたりから卒業式に警官の警備を依頼する中学校が激減したことからもわかるように、バブル景気の到来の引き潮のように沈静化に向かう。少なくとも表立ったかたちで級友や教師を「なぐる」ということは少なくなる（この表向き「学校化社会」の完成が現代のイジメにケータイのような不可視のメディアが利用されることと関係ないとはいい切れないだろう）。

臨教審などの影響もあり一九八四年頃からの論調は、「江戸時代の寺子屋の教育ぶりを記録した資料には、子どもを殴るなどというやり方は、ついで出てこない」（『朝日新聞』一九八四年一月四日朝刊、社説「殴るのは『教育』だろ

うか」というような、教師による生徒の体罰を批判する方向に傾いてゆく。このときに批判されるのが、「教育熱心なあまりに……」という学校側の「言い訳」とされるものであるが、ここには真実がまったくないと言いつけることなどできない。そもそも集団で武器をもって向かってくる生徒たちの凶暴化から、中学校は修羅場となった。生徒の教育に熱心なのは、生活指導などを担当する体育教師などが多かった。彼らは体を張って、生徒が暴力をふるうことをふせいだ。また生徒たちが反発したのは、教師たちの体罰ではなく、内申書に代表されるような管理教育と、規則の適用のあいまいさ（理由や根拠が示されない罰）であった（進学しない中三生をケアする教師は、件の「教育熱心な」タイプだった。より巨視的に見れば、社会の仕組み自体が進学コースに乗った学歴によるしか成功がないかのような、管理型産業社会へと向かってゆくことにたいする不満がその根にはあっただろう。バブル景気により目の前からは見えなくなった学校社会の問題は、体罰の厳禁に代表されるような、教師の自縄自縛、日教組への圧力に見られるような中央権力による教育の管理化により、九〇年代以降の教育問題の地下水脈となる）。

もつともバブル文化を準備するのは、景気局面だけではない。経済状況が文化の基盤であるにしても、文化が景気の将来を予感のように先取りすることもある。一九八三年の嘉門達夫のヒット曲「ヤンキーの兄ちゃん」の歌（作詞—嘉門達

夫)は、「不良」を指す大阪のヤンキーということばを一躍全国に広げた。「ヤンキーの兄ちゃんは……」ではじまる節に、ツバをはく、まゆ毛そる、そり込みいれる、斜めになったメガネかける、ウンコすわりする、婦人モンのサンダルはくなど不良の特徴を羅列する繰り返しの歌で、不良文化をパロディにするようであり、それでもよいと肯定するものでもある両義的な歌であった。「うんこすわり」とは、まるで九〇年代後半の「ジベタリアン」のようでもあるが、九〇年代後半との相違は、特殊な「不良」の素行であるのか、若者に一般化された素行であるかとの点にあり、このことは若者文化の変遷を考える上で示唆的である。

さてファンシーなOLの部屋と、生徒と教師が殴り合いをする中学、こうした混沌とした時代は、同時に管理型権力が最初の確実な一歩を踏み出すときでもあった。福岡発羽田行きの日航機(現JAL)が、羽田沖に急に逆噴射、旋回して墜落した。ボイスレコーダーから「機長やめてください」ということばが判明し、流行語となる。不謹慎ではあるが、小学校のちびっ子から居酒屋の中年まで「機長やめてください」とふざけあうようになる。この事故の原因は機長の精神疾患(分裂病)であった。いまではあたりまえになった企業における「メンタルヘルス」の問題が、顕在化しはじめるストレスの時代のはじまりでもあった——近代の豊かさのなかに垣間見られたほころびは、八六年〜九二年頃のバブル文化によ

り覆い隠されることになるのだが。

## 第二節 バブルとバブル崩壊

景気が社会のひとびとの希望や自信を左右することは間違いない。また文化の傾向が、七〇年代後半ロンドンの不況とパンク・ファッションの関係に見られるように、経済動向から政治変動へ、そして影響を受けやすい若者文化へと伝播することも間違いない。一九八六年から一九九二年頃まで見られた「バブル文化」も、好景気が全般的な「明るい社会」を支える現象であった。

よく知られるようにバブル景気のきっかけとなるのは、プラザ合意による急激な円高である。八〇年代のはじめから日米貿易摩擦(日本の対米貿易黒字の増大、経常収支の黒字)は懸案事項であった。日本車をハンマーで破壊する米国の失業者たちのパフォーマンスがテレビ中継され、当時の社会にショックをあたえたこともあった。日本経済は円高により「内需拡大」の方向で景気を安定させる政策を余儀なくされていた。プラザ合意の翌年一九八六年には、一時的な円高不況があったものの、生産拠点の海外化にともなう投資伸張、とりわけ公定歩合の漸次的引き下げ(五%から二・五%までへ)などの金融緩和により、金融や証券、不動産などのキャピタル・ゲインを原動力に消費拡大をもたらし景気は大きく上向きになりバブル景気(過剰貨幣供給つまり市場でのカネ余り)

に突入する。当時の上向き的好況はそのまま浮ついた社会の空気となり祝祭的な消費を煽る。また円高により、食品から貴金属、衣服、自動車などまで、欧米の輸入商品が「インポートもの」と呼ばれて人気を博すようになる。カタカナ語が氾濫しはじめるのもこの頃からであり、人気職業としてツアーコンダクターやコピーライターなどがもてはやされた。ファッション関係のいわゆるブランド商品は、現代ほど高額高級化していなかったものの、エルメスやシャネル、ヴェイトン、ティファニー、アルマーニなどの「定番」が、一般の学生や会社員、主婦に浸透した。バブル景気の生活への反映は一九八八年（昭和六三年）ともなると誰にも実感されるようになる。大学生たちは、情報・商品アイディアの宝庫として、イベントへの出資や「接待」など企業から厚遇され、会社の役員たちはいまでは一様に削減された「接待費」を使い銀座やキタ新地の高級クラブで数十万もの酒を呑み、一般社員たちは学生たちに入り交じってチェーン店化した居酒屋からデイスコへとはしごをし、会社から配布されたタクシー・チケットで帰宅する夜を過ごすようになる。銀座などの盛り場では、タクシーに乗るために一、二時間待たされることもあった。「トレンディ」である（流行の先端に乗っている）ことがなによりも善いとされ、誰もが新しいものを欲しがった。それは、景気はますますよくなり、技術革新は生活をますます快適にするという信念に支えられており、「夢の未来」の幻想をみなぎらせた時代の話である。

一九八九年（平成元年）は、国内では昭和天皇崩御、世界ではベルリンの壁崩壊に象徴される冷戦の終焉など、ひとつの時代（戦後）の終わりを予期させるに十分なニュースがあった。だが景気は衰えることなく、翌一九九〇年（平成二年）五月には大昭和製紙社（現日本製紙）の名誉会長がゴッホ作『ガシエ博士の肖像』を八二五〇万ドル、ルノワール作『ムーラン・ド・ラ・ギャレット』を七八一〇万ドルで落札した上に、「自分が死んだら（これらの名画も）一緒に焼いてくれ」と発言したことが問題視されたことから推察されるように、どこかおかしいという感覚は巷にあつたようである。「アッシー君」「足」に使う男友だち、「メッシー君」「飯」をおごらせる男友だち）などのことばが流行した頃の話である。女子大生ブーム、女子高生ブームと八〇年代につづいた芸能人ではなく素人的なタレント人気の流れで、この時期には民放女子アナウンサーがタレントにはじめていた。

先ほど話題にした大学生たちであるが、当時は渋谷が若者のメッカとなり、「渋谷カジ」と八九年頃から呼ばれるようになるファッションが流行する。ファッション・リーダーは青山学院の大学生と高校生たちだった。八〇年代の流行ファッションは画一的で、渋谷カジ（渋谷カジユアル）の時代ならば、ヨーロッパ・ジーンズにラルフ・ローレンのポロシャツやブレザーという組み合わせであった。件のファッション



ン・リーダーたちは、ポロシャツのブランドを米国製ラコス  
テやフレッド・ペリーに変えたり、リーヴァイスの501  
や505のウォッシュユなしジーンズを汚してヴィンテージ風  
にはいたり、次世代の古着ブームにもつながるような方向へ  
と、つきからつきへと一般と区別されるスタイルを好んで発  
案していった。だが、「渋谷カジ」も、雑誌などメディアを通  
してファッション・スタイルからライフ・スタイルへと一般  
化するにつれて、山の手私立学校風の「内輪」のスタイルか  
ら、埼玉県や千葉県など近郊の若者を渋谷に集める誘惑に変  
わりつつあった。「チーマー」と呼ばれる、渋谷センター街  
にたむろする若者たちが現れてきた頃には、この傾向はすで  
に明らかだった。彼らは郊外都市から週末の夜に、ハイラッ  
クスやラウンド・クルーザー、パジェロなどの車高を上げて  
大型アンブとスピーカーを積んだ改造4WD車で、渋谷に集  
まってくる新しい不良である。センター街でアイスクリーム  
を食べていた若者が、突然四駆車から降りてきたチーマーた  
ちに殴る蹴るの暴行を受けるなどの事件も発生するようにな  
る。ファッションから見せものとなったサバイバル・ナイ  
フ（電車のなかでも平気で腰のベルトにぶらさげていた）は  
九一、九二年頃から渋谷チーマーに普及し、その後若者一般  
に広がり現在でも殺傷事件の凶器となっている。

さてバブル崩壊は突然やってくる。一九九〇年（平成二年）  
初頭の米国の金利上昇の影響、さらにより深刻なことに日米

構造協議の不安感が拡大し、四月には円安（一ドル＝一六〇  
円）、株価暴落（東証平均、二万八〇〇〇円台）、債券安の三  
重苦がはじまる。この気配による、日本から米国への投資資  
金の流出はきわめて敏感で大規模なものであった。なお悪い  
ことに、湾岸戦争による石油価格上昇を懸念するあまり公定  
歩合に引き上げが八月に行われた。この年、四万円到達も間  
もないといわれた株価が、半値近くまで落ち込むことになる。  
また不思議なほどのタイミングで、四月のトリプル安の直前  
に、土地取引融資の総量規制が大蔵省（当時）から金融機関  
に傳達され、急激な融資抑制により資金調達がままならなく  
なる。前年度に住宅地で五六二%の上昇率を示した地価は、  
九二年（平成四年）にはピーク時と比較して三〇〜四〇%も  
下落することになる。これが、九〇年代末からゼロ年代前半  
にかけて日本経済を苦しめることになる金融機関の不良債権  
処理問題につながってゆく。だが、当時のひとびとの情緒は  
「やがて回復する」という暢気なものだった。ただし若者を  
中心としたバブル文化の消費を牽引した西武、そごう、丸井  
のような百貨店は、すぐさま影響を受けた。前者のふたつは  
二〇〇〇年（平成十二年）前後に経営再建にはいることにな  
る。また新卒採用も、九三年頃から急速に悪化し、ゼロ年代  
も後半になるまで回復されることはなかった。

経済面でのバブル景気の背後に、当時わたしたち日本人が  
見ずにいたものが、その後の「失われた一〇年」という世界

自由市場主義、グローバル化と並行する不況また現在の諸問題に直接関係していることが最近ようやく議論されるようになった。バブル景気は、単なる日銀・大蔵省（当時）の金利政策（公定歩合引き下げから不動産貸出の総量規制まで）に左右されたものではなく、その背景には日本型経営と呼ばれるもの（メインバンク制度、終身雇用・年功序列賃金、企業内福祉など）が世界で高く評価されたことによる信用の高まりや、やがて「護送輸送船団」と揶揄されることになる政治・行政による産業振興と国民生活の双方に配慮する社会形態による安定感などがあった。これらの特徴は、米国をはじめとする他国の圧力のなかで、一連の規制緩和、民営化、グローバル・スタンダードの強制、自由貿易の徹底などにより崩壊してゆくのであり、それは八〇年代の中曽根内閣の一連の「民活」政策などからはじまり、ゼロ年代の郵政改革をはじめとする「構造改革」までつづき、それらが今日の「格差社会」や「プレカリアート」問題を引き起こしている（たとえば労働者派遣法はバブルさなかの一九八六年に施行されている）ことを節の締めくくりに指摘しておくことにしよう。

バブル景気の立役者であった大勲位・中曽根康弘元首相（在任期間一九八二年～一九八七年）は、愛国主義者・改憲論者として知られるが、それと同じほど熱烈なレーガノミクス支持者、つまり確信的な新自由主義者であった。中曽根内閣の方針は、九〇年代の財政収支と景気対策の間に動揺した経済政策の失敗の連続、ゼロ年代の構造改革時代と、現在にいた

るまでの日本政府の政策の基本方針を（未来から来る不可視だが監視する）「亡霊」（ジ・デリダ）のように規定している。中曽根は国鉄（JR）、電電公社（NTT）、日本専売公社（JT）の民営化に象徴される市場主義を進めた。またバブル景気の立役者でもある。これらも米国の意向を受けてのことであるが、年次要望改革書大規模小売店法（通称大店法）の骨抜きも、実質的には海部内閣（一九九〇年）での日米構造協議の調印と年次改革要望書の受け入れ開始が直接的な要因ではあるが、きっかけは同じ「亡霊」の到来であるといえる（漸次的な改正の後一九九八年に全面廃止）。八〇年代末からジャスコなど郊外大型スーパー・量販店が地方に進出をはじめ、九〇年を経てトイザラスなど海外の大型店も出店するようになる。大店法の無効により、消費はショッピング・モール中心のものとなり、地方の商店街の「シャッター通り」への変貌や地方都市の中心／郊外の関係など、風景から生活パターン、社会構造まで、日本社会のあり方を一変させてしまうことになる（『朝日新聞』二〇〇七年九月八日、朝刊、一三面を参照）。

### 第三節 九〇年代前半、資本主義下の剥き出しの生

一九九二年になっても生活や文化のレベルでのバブル文化の喪失感は、「失われた一〇年」を信じるほどにまで高まっていなかった（前年に米国を風靡したダグラス・クープラン

ド『ジェネレーションX』や、「どうも、ども、ども、ども、どんだけどん底？」と歌ったニルヴァーナほどには、先進諸国で共有されることになる近代の行き詰まり感、グランジな感覚は、受けいれられていなかったのだ、バブル文化の日陰の孤独者たちを励ましつづけたブルーハーツが「泣かないで恋人よ」（作詞 真島昌利）を最後に第一線から消えつつあっても、ZARDが「揺れる想い」（作詞 坂井泉水、売り上げ一三九万枚）でひとびとを癒すにはまだ一年あるのだから。この年のほのぼのとした雰囲気は、名古屋市在住の一〇〇歳の双子女性「きんさんぎんさん」がテレビ出演などで国民的人気者となったことに象徴される。だが、東京でいうならば、上野公園、新宿駅西口、隅田川沿いなどに、ダンボールハウス（ホームレスの寝場所）が拡がってゆく。山谷や寿町、釜ヶ崎などの寄せ場は、建築工事の激減などの影響から、機能しなくなりつつあり、現在の失業の街に変わりつつあった。一九九四年（平成六年）には「就職氷河期」が流行語大賞となるが、この頃には誰もが殺伐とした不況の空気を実感したことだろう。渋谷の井の頭線駅近く、新宿歌舞伎町などで、やくざな仕事に従事する日本版ギャング少年ともいえるジャージ姿の若者たちが見かけられるようになる。バブルの金銭感覚から抜け出せなかったのか、俗にCR機と呼ばれる一攫千金型のデジタルパチンコが「黄門ちゃま2」などの人気機種とともに大流行するのもこの年である。一回当たれば、そのまま三〇〇四〇回の大当たりにつながり、二〇万円以上

の「景品」を獲得することもあれば、一日で一〇万円以上も損失することもある大博打である。パチンコ店のレディース向けサービス、インテリアなどの高級化が進むものの、社員、主婦、無職などの常連のなかには、すぐ近くの消費者金融の会員であることも少なくなかった。また同じこの年、ゲームセンターではセガの「ヴァーチャファイター2」という3D格闘技ゲームが大流行する。ボタンのちよつとしたタッチなどから繰り出される必殺技など、熟練するに連れて強くなり、なおかつ（見知らぬひととの）対戦型なので、中毒気味に通い詰める会社員、学生など、一〇代から五〇代まで大流行した。

バブル景気の崩壊から遅れて一、二年でバブル文化に綻びが見られひとびとは多少不安を感じるようになる。四・五年も経つとバブル文化の破綻は誰の目にも明らかになる。このずれの構造に、九〇年代の〈殺伐／クール〉のなかにも前期と後期が見え隠れする。この頃の九〇年代前期は、あらゆる輝きの色あせてゆく過程ではあったが社会はまだ砂漠となつたわけではない。「戦後」に一貫して追求され、バブル期に絶頂を見た、経済成長により豊かになるという「欲望」は疵付けられ、社会の辺幅修飾のひとつひとつが剥ぎ取られてゆく。欲望は比較的長期の将来にわたる活動（日常生活のパターン）の方向性を定めるものであると同時に、近視眼的な欲動の発露を抑制し、欲動を束ねる役割をしている。したがっ

て欲望を欠いた無秩序な欲動は、刺激—反応的な思慮のない行動の炸裂にもつながる(後の文脈にも関係することとして、フロイトが指摘した「文化」が有する、殺人や近親姦などの「禁止」の声の衰えと並行する現象である)。パチンコや格闘ゲームに湯水のように金を使う姿は、ときには相手の目の前で財宝を粉碎して威力を示すという北米先住民の儀礼ポトラッチのような、破滅的な贈与を連想させる。そもそも資本主義的な近代社会のなかに、破滅とまではいわなくとも、蓄積された巨大なエネルギーが負に反転する蕩尽的な傾向が孕まれていることを、当時の光景は事物教育のように教えてくれる。欲望とは、幸福で全能の幼児期にもたらされた「充足体験」を、言語的規範に機制されたおとなのやり方ではなくて、非社会的なあり方で再構成しながら充足しようとする情欲や渴望の動きのことでもある。カード購入したパチンコ玉のじゃらじゃらと流れ出る映像や、両替機で一万円札を両替した百円玉の嵐の映像は、バブルというわたしたちの幸福体験を再現するように知覚からパチンコやゲームに感溺する欲動的な行動へと走らせたのだろうか。バブルの記憶痕跡もたらず欲望は、(知覚同一性のつねとして)明らかに狂っている。だが資本主義社会(つまりわたしたち先進諸国の近代における平均的生活の来歴)はつねに、秩序維持的な働き(自己保存欲動)に対抗するかのようになり、秩序破壊的なリビドー(欲動のエネルギー)を内包しているものなのだ。資本主義の政治経済体制がときに権力による秩序維持をはかろうとす

る動きが目立つのは、それが資本主義そのものの本質であるというよりも、資本主義に不可避な秩序維持の傾向の欠如のためなのである。資本主義の運動と切り離すことのできない「進歩」というわたしたちが共有する幻想も、そのリビドー的なエコノミーを基盤とするものなのである。<sup>5)</sup>

さてこうして文化(アーチスト)はいつも政治の世界(権力者)に従属している。わたしたちが求めるアートは、わたしたちの情緒に発するのであり、その情緒は社会の趨勢に規定されがちである。社会のかたちを定めるのは、政治や経済である。だから先に述べた文化・生活面での現象は、原則として、ある政治や経済の布置により、つまりその従属的關係やその反発的關係により定められていることになる。

八〇年代末から九〇年代前半にかけて、日本の政治は大きく動揺した。バブル景気のさなかの一九八八年(昭和六三年)、ベンチャー企業からの転換期にあったリクルート社が、当時の首相・竹下登、蔵相・宮沢喜一、自民党幹事長・安部晋太郎、また中曽根元首相など、自民党政権の真の中枢の秘書や家族に及ぶまで、関連会社リクルートコスモス社の未公開株をばらまいていた、大疑獄事件いわゆるリクルート疑惑が発覚する。バブル崩壊後の一九九三年八月には、「五五年体制」後初の政権交代となる、細川内閣(諸政党連立から新進党へ)が発足する。冷戦下に外国政府機関から援助を得ていない政



党による本格新政権と期待されたが、政治資金の疑惑などにより、新進党政権は崩壊。一九九四年六月に、自社さ（自民党・社会党・新党さきがけ）の連立政権（首班・村山富市）が誕生する。戦後、政権を失ってからも、一・五大政党制などと揶揄されながらも、日本を代表する野党であった社会党が、宿敵の自民党と組んで与党になったのである。このことは、政治の変革を求める市民にとり裏切りと受け止められ、経済の変化による政治意識の歴史的低下は要因としてあったものの、日本人の政治への不信と無関心を加速させることになる。

文化や生活の面でも、わたしたちは九〇年代に多くの「戦後」的なものを失ったけれども、それはまったく新たなモノを獲得した時代でもあった。ケータイ（一九九三年、第二世代）、インターネット（一九九四年、一般向けサービス）、カラオケボックス（一九九二年、通信カラオケ登場）……、だがまた道徳、公共意識、ゆとり、金や仕事や住処（自己破産、リストラ、ニート、フリーター、ホームレス）、規範（学級崩壊、不可解な犯罪）を失ったともいわれる。このことは、テクノロジが精神を駆逐したという技術決定論ですますことができないのだろうか。

第一に、失ったものとして列挙したものの中にも「少年犯罪の凶悪化」や「学力低下」、「性意識」のように専門家のなかでその事実性や善悪をめぐる論争のあるものもある。

第二に、「ゲーム脳」のようにそれらの現象へのテクノロジの影響についてもなおさらのこと論争的な状況にある。筆者は、第一の点については、ほぼ認める立場であるし、第二の点についてはやや否定的であるものの、技術決定論ではなくて、人間と技術の関係が変わりつつあると言い換えるのが望ましいと考えている。ジルベール・シモンドン風にいえば、いつの時代でも技術と精神は横断個体化 transindividuation の関係にある。精神と技術は、一方の個体（存在）が他方の環境であるという意味である。精神が立ち上がるのと同時に技術は立ち上がる。かつては主体が技術を有用に利用するという道具的に考えられた関係が、いまでは再考を迫られている。またもしも両者が横断個体化の関係にあるならば、精神と呼んだわたしたち人間主体の個性や、人間のあいだでの個体化もなにかの変容を迫られているということになり、これが第一の点に関わっていると推測することもできる。

こうした状況のなかで「社会」や「文化」についての語りは、動揺を隠せずに混乱した議論を生み出してきた。ただし、あらゆる社会的規範や文化像の大変貌に、不況という希望のない生活状況が荷担していたことはまちがいないし、その影響をまっさきに受ける将来の担い手たちである若者についての語りにこそ、議論の混乱の特徴が現れていたといえる。このような対立の背景には、ネオリベリズムの価値観を逆説的にも不況が後押しし（経済成長と自由競争が自己の生存の袋



小路からの脱出口だと信じること)、たとえば大学制度のなかでの文学部の失墜と社会科学に特徴的な「科学主義」の普及といった知の変容という大問題が含まれていた。

九〇年代の「情報の多様化」の傾向を、「データベース化」や「データベース型世界」の語で、いち早く察知したのは東浩紀(『動物化するポストモダン』、講談社新書、二〇〇一)である。このメタファーは、情報コンテンツに限らず商品一般の多様化による、わたしたちの社会のアーキテクチャーの変容を鋭く指摘している。たとえばデータベースそのものを思い浮かべてほしい。ここではパソコン上のものではなく、資料分類カード時代のもの、カードを収納する引出しが縦と横に無限に伸張してゆく巨大な書類棚である。

たとえば、X軸は渋谷系、裏原系、あるいは癒し系、スピリチュアル系など、さまざまにメディアにより増幅されたジャンルを指すでしょう。もちろん、米国八〇年代調などというものもあるだろう。Y軸は、恋愛、人生、生活、芸術、音楽、学問、文学、政治などの制度的なカテゴリーとする。これらの引出しで、音楽であり渋谷系であれば、その箱にはオリジナル・ラブやフィッシュマンズのカードが溜められている。

データベース社会という帰結は、大量生産の時代にマス・マーケティングに源泉をもつ、欲動のコントロールの成果に

ほかならないだろう。わたしたちの欲求は、わたしたちの願望として未来から到来し、欲求を未来へと向けて現在を機制する、本来の文化的なあり方ではもはやなくなっている。なぜわたしたちは期待や希望を失ってしまったのだろうか。

八〇年代から九〇年代への転換に顕著であるトリックル・ダウン式の流行のねつ造によるマス・カルチャーから、顧客特化(カスタマイズ)やピンポイント型のマーケティングによる商品の氾濫と新商品のサイクルの加速は、文化産業のみならずあらゆる産業(ステイグレルが「ハイパー産業社会」と呼ぶもの)が加担する管理社会コントロールの産業面を完成させつつある。情緒をコントロールし、消費行動を統制し、イノヴェーションすらも、新製品のサイクルにより厳密に計算される社会である。わたしたちの本来のリビドーの備給は方向を喪失し、その場限りのナルシズム的個人(C・ラッシュ)の快楽の供給につねに不満を抱きながら、社会全体を長期的にながめたときには産業により外界から「脱備給」されている状態にすらある(缶・ペットボトルいりの日本茶は伊藤園の「おいお茶」が一九八九年発売開始、その後お茶戦争ともいわれる時代になり、いまでは約一六〇種の茶類が販売されているが、しかし一六〇種類の茶をわたしたちが望んでいるのではないし、衝動的に欲求するのでもないことは明かである)。

九〇年代には平均視聴率二〇%を超えたドラマが、五〇以上もあるが、わたしたちはそのほとんどを覚えていない。カ

ラオケに行つては、限られた数のドラマ主題歌「Say Yes」(「101回目のプロポーズ」)、「True Love」(「あすなろ白書」)、「愛が生まれた日」(『そのうち結婚する君へ』)を懐かしく歌う。それらの歌は、ドラマで聴いたことがない場合であっても、時代に共有された名残りとしてわたしたちの記憶痕跡を賦活(再想起)させる懐かしい「対象」なのである。わたしたちは、ひとびとのリビドーが束となり社会の「欲望」すなわち未来を形成していた時代、取り戻しようもない八〇年代以前の映画やドラマ、音楽をリメイクしながら「対象」とし、そこに「固着」を生じさせ、精神的な意味でも歴史的な意味でも、「退行」の時代にはいりつつある。

フランスの哲学者ベルナル・ステイグレルは、二〇〇一年一一事件の後、ポピュリズム化する大統領選と政治・社会一般の動向を批判する一連の著作を旺盛に執筆している。ここ数年のステイグレルの社会批判の論点を要約するとつぎのようになる。テレビ放送をはじめとする受動的メディア(「第三次過去把持」)による大衆の人工的な時間の均質化(シンクロニゼーション)があり、産業管理および産業ポピュリズムにより、絵を描く、文章を書くなどの伝統的なひとびとの表現活動が失われている(「象徴の貧困」)。このことは、表現した対象に自己が反映されているからこそ愛するという「根源的ナルシズム」の喪失を招いている。自己を愛せないから他者を愛せないという社会の紐帯の綻びが見られる。

また根源的な問題は、未来を希望するという「欲望」こそが社会的なもの(他者との関係)を構成しているのだが、産業的ポピュリズムによる管理(コントロール)により、ひとびとは単なる本能的な欲動に身を任せてしまっている。欲動を束ねる欲望が崩壊しているために、資本主義社会の原動力そのものであるリビドーのエコノミーが崩壊し、社会は停滞し、希望のない、欲動的な、「ゼロ度の思考」の時代を迎えている、というものである。

一九八〇～一九九〇年代の日本社会を現在(二〇〇七年)の視点から鳥瞰するならば、このステイグレルの社会批判のある部分が、きわめて明瞭に歴史的プロセスとして現れる。また重要なことは、ステイグレル自身は、フランス社会がとりわけ危機にあると思っているのだが、八〇年代以降のネオリベリズム的グローバル化のなかでは、どのような先進諸国であつても、また中国のようにこれから先進諸国となろうとする国々でも、基本的にフラット化された世界で同一の問題と歴史プロセスを歩んでいるということである。第二次オイルショックを抜け出して、バブル景気へと躍り出る一九八〇年代の日本は、産業的資本主義の絶頂(可処分所得の増加と、商品のヴァラエティ化、多様な消費生活など)を、他国よりもわかりやすいかたちで先導していたかもしれない。

八〇代のサービス産業の伸張や目新しい輸入商品の日常化

は、九〇年代の不況期にあっても、止まらない流れとしてますます加速する。八〇年代には「欲望」の対象であったサービス&商品は、九〇年代になり「終わりなき日常」(宮台真司)を演出する飽和点に達し、ごくあたりまえのものでありながら、そこから抜け出すことはできない耽溺にわたしたちをとらえている。九〇年代末からゼロ年代になり、若者だけではなく、三〇歳代や五〇歳代の大人が、電車内で「ケータイを注意された」などの理由から、衝動的な暴力行為に走るといふ事件が複数あった。これらは徴候でしかないかもしれないが、車内で携帯電話を使用するに際してのルールの意味を意識・思考として理解し、相手の注意をことばとして論理的に解釈していれば、突発的な暴力という、欲動のほとばしりそのもののような事態にはいたらないだろう。また九州で、テレビの修理を依頼したが直っていなかったことに腹を立て、量販店のガラスの正面から自動車で突入した老人の暴挙はきわめて象徴的である。テレビという欲動にのみ訴えかけるメディアに耽溺するあまり、思考を経ない欲動「見たい」が、「見られない」の禁止のリミットを破り、自動車で店を破壊するというきわめて衝動的な行動に出るのである。

わたしたちを現在取り巻くメディア環境が、「象徴の貧困」を生んでいる。だからこそ、現代の歴史を書くものにとり、メディアは重要な一次資料なのである。さらにドラマや映画のなかで、わたしたちが消費し忘却したのもあれば、わた

したちがそこに愛着をもちつづけるものもある。九〇年代の現象を考える際に、現在からの歴史的距離により、そのような選別の意味を考えることはたいせつである。

映像ドラマは、世間の欲望や社会の空気の方向を読み取り先取りして表現するというだけではなく、とりわけ『高校教師』(テレビ、野島伸司脚本、伊藤一尋プロデュース、TBS、一九九三)の場合のように入念な取材にもとづいたものもあり、確証的な関係資料と相互比較することで、ドキュメント(記録資料)として使用できるものである。『高校教師』が放映されたの九三年は、阿部和重が『アメリカの夜』で書いた「小春日和」が終わろうとしていた時期である。この小説の主人公は渋谷seedホールの展示室で、イスに腰掛けて室内係をしながら読書をするのを楽しみとしていたのだが、ある日突然、勤務中の読書が禁止される。平成不況のなかで、今日にいたるまで、職場や学校のあらゆる息苦しさとなっている規則の圧迫の象徴である。

このドラマはショッキングな話題をいくつか扱っている。たとえば近親姦や女子高教師による生徒のレイプ、教師と生徒との恋愛、同性愛などである。近親姦というテーマ自体は、時代の特徴ではない。普遍的な禁止であるからどの時代にも侵犯が見られるものである。だが、このドラマのなかでは近親姦も、学校という場の息苦しき、少年や青年であるこ

との弱さを増加させる装置のひとつでしかない。一七歳の主人公二宮繭（桜井幸子）は父親との近親姦に悩みながら「助けて」というメッセージを、新任教師の羽村隆夫（真田広之）に送りつづける。近親姦やレイプという、屈折や挫折の「傷」からやがて物語は羽村と二宮の純粹恋愛の物語へと昇華してゆく。その周囲の出来事も、忠実に時代の「雰囲気」を表現している。教師にレイプされた一七歳の相沢直子（持田真樹）は妊娠してしまう。だが、このことを公にすれば自分は世間のくだらない興味本位の視線のまとなってしまふ。また生徒たちを一樣に「退学」という最大の罰、人生のルールから脱線させる罰が恐怖の支配をしている。生徒をほんとうに思う体育教師は、体罰教師として生徒のみならず同僚の教員たちからも鼻つまみ者にされている（このことはすでに指摘した八〇年代前半の校内暴力の経緯が関係している）。法や校則のようなあらゆる規則が、「管理」や「監視」により機能不全に陥っている絶望的な世界である。このなかから二宮たちの純粹恋愛は、浄化された暖かい聖域へと立ちのぼってゆく。これは同時代の視聴者たちの多くが見た憧憬の象徴かもしれない。

羽村は二宮とうまく向き合えず、ふたりの関係は紆余曲折する。あるときには、二宮は電話ボックスからテレクラに電話をし（ケータイのない時代だ）、会社員風の中年男と待ち合わせするが、家族でも会社でもそういう場がないのか、この男が二宮に会ってはじめてのは「説教」である。このドラマは九三年という早い時期にもかかわらず、管理社

会の行きにくさを描いている。リビドーの行き場のなさ、わたしたちの寄る辺なさ、感性は支配されかかっている、（われわれ）を喪失しつつある、そうした時代に共有された精神を、逆説的にもこのテレビ・ドラマが表現しているのである。九三年といえば、まだバブル崩壊の影響は生活レベルまで達していないけれども、ある予感のような時代精神がそこにはあった。脳天気なバブル文化の人工的環境により、伝統共体的関係の鎖が破綻していたことを、バブル崩壊によりわたしたちは知らされるのである。

さて、『高校教師』と『失楽園』の間、一九九三年と一九九七年の間には、（一九九五年）がある。この年に、阪神淡路大震災が生じる。そこでの生きるか死ぬかの避難と救助の活動に見た、相互扶助の関係を、「人情があつてうらやましい」といわしめた莫迦げた精神構造がこのときにあったとだけ、ここでは指摘しておこう。

この砂漠の先にオアシスはあるのだろうか。「失われた一〇年」や「空白の一〇年」といわれる一九九〇年代の日本社会を生きた者の多くは、砂漠を歩く実感と見えない未来の不安を一度くらいは感じたことがあるだろう。バブル景気崩壊後の不況のなかで、中年層は大量に解雇（リストラ）され、若年層も就職難にあえいだ。同時に、世界的な潮流として、グローバル化とネオリベリズムの拡大があり、社会保障費



の削減、自由競争社会の本格化などの余波も受けることになり。貧困や将来への失望から、家庭、学校、社会と、どの場面でも暗く殺伐とした空気が支配することになり、この人間関係のぬくもりの消滅が、ますますとひとびとを鬱屈とさせるのであった。その帰結は、サブカルチャー、インターネット、現実政治にまで蔓延するネオナシヨナリズムの擡頭、学校でのいじめ問題から家族間の殺人、公共性のマナーの崩壊など伝統的共同体規範の破綻など、はば広い現象となって表れることになる。

しかしながら九〇年代は二〇〇〇年代の現在と比較しても、天然資源の枯渇、人口問題、地球温暖化など、明かな物的行き詰まりが深刻になっていったとはいえない。景気に心性が左右されながら、ハルマゲドンを渴望するアニメや宗教団体など、スピリチュアルな次元での「終末感」がひとびとを支配した時代だといえるだろう。

#### 第四節 九〇年代後半、オウムと阪神淡路大震災の後の剥き出しの生

一九九七年「援助交際は売春です」という大阪府警のポスターが貼り出される。リストラが失業であるのと同様に、援助交際ということばの軽さがこの傾向を助長しているというわけだろう。実際に一九九六年頃から、中学生や高校生が二

〜五万円ほどの金銭と引き替えに、ヌード写真を撮影させたり、性的行為を提供する「援助交際」が社会問題になっていた。援助交際のネットワークは、テレクラなどの電話サービスやデートクラブのようなハコものを中心だったが、友人の口コミ（客の紹介）も少なからずあったという。『失楽園』もそうだが、大人も子どもも死の欲動に忠実なほかないセックスに耽溺していたのである。

インターネットの普及以前に、ダイヤルQ<sub>2</sub>（一九九一、NTT）が人気となった。パーティーラインやツーショット、伝言ダイヤルなど多様なサービスで、「ナンパ」目的の利用も多かったというが、高額な利用料の支払いやQ<sub>2</sub>で知り合った人間の売春や殺人事件など、現在のある種のインターネット・サービス（「出会い系サイト」）が生む犯罪が、メディアそのものの批判に至る傾向が見られた。

また援助交際につながるような、素人の性風俗として、「ブルセラ」があった。使用済みのブルマーやセーラー服をブルセラショップに売り、ショップはマニアに売るという仕組みである。ビデオも登場するようになり社会問題となる。「ブルセラビデオ」とされるアダルトビデオに関して、一九九三年五月、撮影者の通称「ブルセラ帝王」が逮捕、その後八月にはビデオを販売していたブルセラショップ『R』渋谷店も古物商法違反で摘発される。出演していた女子高生たちも一〇〇人規模で補導された。これをきっかけとして、ワイドショーや週刊誌を中心に「ブルセラ女子高生」が大々的



に報道されるようになる。一九九三年頃から、渋谷道玄坂や新宿歌舞伎町の賃貸マンションでの経営が広まる。ブルセラシヨップには、デートクラブを兼ねたところも多く、援助交際の問題とまちがいに重なっている。指名料五〇〇〇円程度で、集まる女子高生とデートさせるといふれこみだが、実際には二万円程度で売春をしているケースも多いことが明らかになった<sup>7</sup>。

先に言及したふたつのドラマは、九〇年代に特徴的なものであったとしても、平均視聴率二〇%を超えるドラマが五〇本以上（！）もあった時代としては、誰にでも共有されるものではないだろう。東京の山の手系大学で行ったポスト団塊ジュニア世代の若者（二〇歳～二五歳）を対象とする小規模の調査（母数一〇〇弱、二〇〇七年実施）では、『高校教師』については若干の支持が見られるほどで、『失楽園』は関心がないかまたは嫌いという回答がほとんどであった。いまだはDVD視聴が一般化し、興味深いことに放送によるリアルタイム世代の支持ときわめて違う評価が見られ、世代ごとの特定の時代の文化商品の「定番」がまったく違うように認識される場合もあることだ。「九〇年代を代表するドラマ」との設問では、『ロング・バケーション』との回答が圧倒的多数であり、当時小学生から中学生までの間にあった学生たちがリアルタイムで熱心に視聴していたとは考えにくいことから、両親の世代の支持や、その後のアカデミックやジャーナ

リストイックな言説による『ロング・バケーション』の共記憶―神聖化に影響されていると考えられる。だが、重要なのはあれだけヴァリエーション豊かなテレビ・ドラマが開花した時代であっても、その人気や熱狂は放送クルールを中心とする一過性のものであり、二〇年経てばほとんどが「なかったことになる」という「加速された文化」の特徴性である。

同じ調査で音楽に関して、「九〇年代を代表するアーティストは？」との質問にたいして、最も多い回答がサザン・オールスターズであるという、まるで情緒が一九八〇年代に回歸するような結果が見られた。スピッツとの回答はなく、ミスター・チルドレンでさえ、ごく少数の回答に留まった（三位の安室奈美恵よりも、SPEDが上位であったのは、彼らとの年齢差の近さが原因として考えられるだろう―ちなみにその下の世代ではミスチルやスピッツがまた好まれている）。いずれにしても、中島みゆきという回答もあるように、時代は一回りして、九〇年代という情報の嵐が過ぎたあとには持続に耐える「定番」が再選別されたといふべきだろう。当時の視聴率二〇%ドラマがつきつきと忘却の淵に消失してゆく一方で、『恋人よ』（一九九五年、野沢尚脚本、喜多麗子プロデュース、フジテレビ）のように当時はヒットしなかったものの、小説のようにプロットがしっかりした古典的「物語」はゼロ年代になり、再放送やDVD視聴が可能となると若者を中心に根強く支持されるようになる。

一九九〇年代後半といえ、この世代の若者たちにとって

は一〇代の時期である。そして検証のない仮説ではあるものの、九〇年代後半の重い空気は当時の消費生活の中心者たちには持続のない刹那の欲動の環境ではあったものの、いまの若者に限らず、当時を生きた世代にとっても、それはトラウマのように、隠蔽しなければもはや前に進めないような暗い記憶なのではないだろうか。一九九九年には、宇多田ヒカルの『Automatic』（作詞 宇多田ヒカル）がミリオンセラーの大ヒットとなり、NY生まれの歌姫と支持された。また「癒し系」が流行語になり、街にはマツサージ店やエステ店がつぎつぎとできるようになる。時代はまさに渴きを癒すことを必要としていた。景気はますます悪化するばかりで、インターネットや脱サラの現象も見られるようになる。自己破産は一二万件を突破、失業率47%となり、職安はハローワークと名称を改めた。

不良債権処理や金融不安で経済が停滞するなかで、ひとびとの孤独感も強くなる。「東電OL殺人事件」（一九九七年）は、夜には娼婦の顔をもつエリートOLが殺人されるといふ世の常である猟奇的事件のセンサーショナリズムから世間の耳目をひくことになる。また同年、十四歳の少年が、児童の頭を金槌で殴る殺傷事件の後、淳君一歳を殺害し、翌朝中学校の正門の前に切断した頭を置き、口のなかに犯行声明が書かれた紙片を差し込んだ。「酒鬼薔薇聖斗」の事件は、世の中の「少年」への眼差しを一変させた事件である。

九〇年代後半は、不況（個々人の満ち足りなさ）からナシヨナリズム（過激な外部への攻撃性）へという流れは、近代に繰り返されてきたことではあるが、バブル崩壊以降の雇用ルートの不安定化（後にニート、フリーターと呼ばれる）による実存面での強迫的不安、猟奇的な事件の頻発による社会的な防衛本能が後押しするかたちで、若者たちをナシヨナリズムに向かわせた。近年口にされる「ネット右翼」の現象は、すでに九〇年代末から見られた。一九九七年新年には藤岡信勝や西尾幹二といった学者たちが、中学校社会科の教科書を刷新することを目的とし、「新しい歴史教科書をつくる会」を発足させる。憲法九条の前提となる日本の帝国主義時代の反省のなかで、とりわけ中国や韓国にたいする戦争の罪の認識を、「自虐史観」とし、「自由主義史観」という否定主義や歴史修正主義と非難されることになる歴史観を主張している。早々に、自民党や一部民主党の若手議員が連携した勉強会を組織し、政局のなかで彼らが力をもつようになることで、ゼロ年代の改憲論議にまで至ることになり、ますます歴史教科書の検定や選定にまで影響力を及ぼすようになっていく。同時期の小林よしのりの漫画も若者に深く影響を与えた（『健りベラルや革新派の言論のなかでも、一九九五年に『群像』に掲載された加藤典洋「敗戦後論」を出発点に高橋哲哉との間で論争となり、ネオナシヨナリズムに優位な状況を与える結果となるものの、論争全体のなかでは誤読や誤解も含まれていた）。文芸誌・論壇誌も、『諸君！』（文藝春秋社）

や『正論』（産経新聞社）などの保守系をのぞいては、部数が減少する流れがこの頃に生じた。

一九九七年、九八年と、カルト的な支持から社会的な人気となった、沖繩出身の女性シンガーCoccoの歌った詩は、この時期の「殺伐／クール」を象徴している。そのCoccoは、自分にとり歌うことは「うんこ」と同じ、はき出さずにはいられないと語る。ゼロ年代になりサブカル／オタクという対立が語られるようになるけれども、おたく系アニメの特徴となる「セカイ系」の宇宙も、これとそう遠いところにはないように思われる。ゼロ年代初頭の『最終兵器彼女』（高橋しん作）に代表される「セカイ系」は、学園のなかの若いふたりの恋物語が、突然世界大戦や宇宙対戦のような壮絶な破壊的セカイのなかに巻き込まれて、親密なふたりの関係と世界の趨勢が奇妙なことに直結してしまう状況を描いている。すでに『新世紀エヴァンゲリオン』にも十分にこの特徴は指摘しうる。

### 終章 結論にかえて——管理社会の現状

エロス（生の欲動、現実原則）すなわち生きることの欲求が、タナトス（死の欲動、快楽原則）とのバランスの上に立っている。絶望的な社会は、死の欲動にとつての境位なのでもあり、そこで性の衝動が増加することも論理的である。欲動の根本原理であるセクシュアリティは、遺伝子的戦略なも

のと理解すれば自己保存本能であるのに、精神分析的にいえば快楽原則という破壊の入り口にもある。だからカップル間の学園恋愛というセクシュアリティの欲望がいつのまにか世界の壊滅というタナトス（死の欲動）に変貌してしまうことも、必ずしも人工的創造とはいえないのである。バブル崩壊から九〇年代後半に猖獗を極める殺伐感覚の蔓延は、不気味さの要因としての反復強迫をいつも含んでいる。反復強迫とは、欲動の最も根源的な性質であるといわれる。意識せずと同じ道に何度も戻ってしまうことの不気味さや、同じ番号が繰り返しあらわれる偶然の不気味さなどの例をフロイトは挙げていた。九〇年代末の泥沼の状況を、これと比較してもよいだろう。不気味さとは、われわれが現在目の前にしている現実の隙間から、かつて慣れ親しんだ根源的な世界が漏れ出してくる時に体験される感情である。二〇〇六年のあるインタビューで、二〇歳代末のあるフリーターの声が聞かれる。「戦争が起きて欲しい。このままの生活ではどうにもならない。貧困の中で死んでいっても誰も振り向いてくれないが、戦場で死ねば誰か哀しんでくれるひともあるだろう」。これもセカイ系のひとつであろう。

こうした現象と平行して、わたしたちの社会はいつのまにか、監視社会でありかつ管理社会であることになった。Nシステムや商店街監視カメラ、住基ネット、個人情報保護法など、さまざまな監視の目が働くようになった。また同時に、自衛隊の活動の拡大など、内政面だけではなく世界規模での

治安強化が生じるようになったのである。二〇〇七年のいま、八〇年代から九〇年代にかけての二〇年間をふりかえると、わたしたちはたくさんの「ジャンル」を手に入れたのに、複雑な「多様性」を同時に失ってしまったといえるだろう。日常生活のなかでも、銀行や百貨店など企業の大統合があった。ジャンルの多様性を尻目に資本、とりわけ金融経済の拠点は集中しつつある。〈わたしたち〉が崩壊するなかで、戦後が焼け野原からスタートした競争により活気づけられた季節であるとするならば、真の意味での「戦後の終わり」といえるだろうし、近代の終わりすら予感させる不安にも満ちている。

（筆者・明治学院大学教養教育センター准教授）

1 本論文は、岩崎稔・上野千鶴子・北田曉大・小森陽一・成田龍一編『戦後日本スタディーズ』(紀伊国屋書店、2008年刊行予定)所収の「ポストバブル文化論」『Social Science Japan Journal, volume 11 (Oxford Journals, to be published in 2008) 所収の“True Faces of Japanese Society in 1980-1990” s. De-facement of the <post-war>”と密接な関係にあり、一種の<avant-texte>であり、それらのオリジナルのかたちである。

2 宮沢章夫『東京大学<80年代地下文化論>講義』、白夜書房、二〇〇六は、八〇年代通史として上述拙著が扱わなかった部分、とりわけ八〇年代前半のニューウェイヴなどについて、大いに参考になるだろう。また、ホイチョイ・プロダクションズ『気まぐれコンセプト クロニクル』、小学館、二〇〇七に収められた当時の四コマ漫画は、「ギョーカイ」を中心におそらく取材にもとづく実話をネタとしており、バブル文化期とその前後の雰囲気がよく感じとれる。

3 ニューアカの旗手と呼ばれたくく若手の部類の、浅田彰(経済学、哲学)や中沢新一(宗教学人類学)の当時の著書はいまでも簡単に入手できる。ニューアカを概観するものとしては、一九八四年(日本篇である第二巻は一九八六年)に別冊宝島として刊行された『わかりたいあなたのための現代思想・入門』が文庫されているし、近年の整理としては、仲正昌樹『集中講義!日本の現代思想』、NHKブックス、二〇〇六などがある。当時は、中村雄二郎(哲学)や山口昌男(民俗学)、蓮實重彦(フランス文学)、柄谷行人(批評理論、哲学)など幅広く読まれたことに注意すべきだろう。

4 cf. Luc BOLTANSKI et Eve CHIAPELLO, *Le nouvel esprit du capitalisme*, Editions Gallimard, 1999.

5 これら理論的な背景に関心のある方は、ジャン・フランソワ・リオタール『リビドー経済』(杉山吉弘・吉谷啓治訳)、法政大学出版局、一九九七、ハーバート・マルクーゼ『エロスの文明』(南博訳)、紀伊国屋書店、一九五八、ジークムント・フロイト『幻想の未来/文化への不満』(中山元訳)、光文社古典新訳文庫、二〇〇七、またベルナル・ステイグレルの「象徴の貧困」および「不信仰と信用失墜」シリーズ以降の一連の仕事(一部邦訳あり)などを参照してほしい。

6 一九九〇年代末から二〇〇〇年代の現在にかけて、「社会」や「文化」を語ろうとする者たちの言説は、混乱しながらも大きくふたつに分けられる対立的な言説となりまとまりつつある。バブル景気崩壊後の経済不況の「失われた一〇年」は、単なる不況ではなく、八〇年代末のベルリンの壁崩壊やソビエト連邦解体に見られるイデオロギー対立の崩壊(「歴史の終焉」と自由主義の勝利)や、デジタル・メディアや通信機器の発達とそこに同伴するグローバル市場の編成による商品の多様化による生活様式の変化(ポストモダン)、ネオリベリズムの進行、環境問題などの資本主義の負の遺産などの世界の動向の急激な変化に加えて、「戦後日本」という経済発展と安定雇用(日本型経営)による豊かな社会づくりが目的を失い、受験から雇用までメガコンペティション社会が絶頂に達しながらも豊かさを実感できないというジレンマのなかから生じた、ネオナショナリズムや家庭や会社、国までのレベルでの共同体意識の崩壊、社会的意識の減衰などが複雑に絡み合った、「価値」や「目的」の失墜という深刻な問題を含んでいた。浅



野智彦（浅野智彦編『検証・若者の変貌』、勁草書房、二〇〇六）は、パブル崩壊後の景気低迷の「失われた一〇年」は「若者論の失われた一〇年」でもあったとし、ネガティブな若者像の編成とそのパッシングを検討している。浅野が区分する若者パッシングの論調の第一のものが、パラサイトシングル論、フリーター批判やニート批判（社会的ひきこもり）批判）など、個人消費の低下、労働技能の継承の消滅、年金財政の不安定化などの影響を憂うもので、どれも日本経済のマクロな水準に関わるものである（p.88）。第二のカテゴリーは、道徳論であり、電車のなかのマナー（ケータイ使用、化粧）など公共意識の低下を批判するものである。

後者は主に人文系研究者（倫理学者、精神分析家など）に関して、「若者を鍛え直せばよくなる」という結論はたしかに安直である。「若者を鍛え直したい」との欲望が先にあり、そこから議論を逆行させて若者の危機の原因を導くという転倒した論理に陥りがちである。これを批判する社会学者たちの統計データは、若者批判の論者たちのいう「原因」や「徴候」が数字として間違っていることを指摘する（若者は変化していないことを証明する）が、この場合はまた、暗に含まれる結論として「現状のままでもよい」ということになってしまっているのである。どちらのスタンスの論者にも求められるのは、むしろ現実がいま若者がどうであるのか、問題はあるのかといった事実から始めて、議論することなのである。社会学者たちの若者批判に対する一種の「パッシング」は、教育、労働（ニート、フリーター）、少年犯罪などに関して行われてきた。少年犯罪の増悪の議論にたいする批判としては、広田照幸、また鮎川潤（少年犯罪一ほとんどに多発化・凶悪化しているのか）、平凡社、二〇〇一）らにより、二〇〇〇年にはいつてから顕著となったたり、その議論の有効性は大きなものであったが、その後の論者の議論は同じ統計データの反復であり、有効な議論とはなっていない。

むしろ質の角度から議論を再検討することが待たれる。たとえば「殺人事件」は一樣に殺人事件なのではない。凶悪犯罪のひとつなのでもない。た人事件が家族内で起こる、高校生が父親を殺し、老夫婦が互いを殺し合う、こうしたときにわたしたちが不気味な印象を受けるのは、なにもワイドショーの報道によるだけではない。動機が理解不能な事件にこそわたしたちはとまどうのである。

7 宮台真司・中森明夫・藤井良樹『新世紀のリアル』、飛鳥新社、一九九七など、藤井良樹の一連の仕事が参考になる。藤井良樹がブルセラについて書いたのは一九九二年秋だが、ブルセラショップ自体は一九八五年頃から存在していたという。「女子高校生デートクラブ誘拐事件」などを経て、一九九七年八月一三日、東京都は「デートクラブ営業規制条例」を施行、一八歳未満の店内立ち入りを禁止することで、女子高校生デートクラブは成り立たなくなった。藤井の取材では、女子高校生側は完全なビジネスであるのに、三〇歳代の男性を中心に真剣に恋愛を告白されたり、ストーカー被害を受けたりといった、大人にならない男とビジネスと割り切る（その背後には「居場所」のない寂しさもあり、デートクラブなどの交流をビジネスとして自己に向けて整理するという屈折した側面もある）若い女性とのアンバランスな関係が目立つ現象である。

ルポライター・藤井良樹のいち早い報告と、社会学者・宮台信司の論壇発言により広まり、その後一部学者も巻き込んだマスコミのパッシングなどが起こり、論争となる。